

國學院大學學術情報リポジトリ

「たまプラーザ宇宙の学校2012」報告：
学生の動きを中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀江, 紀子, 柴崎, 和夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001254

「たまプラーザ宇宙の学校 2012」報告

―学生を中心に

柴崎 和夫、堀江 紀子

Report on “Space school 2012” in Tama Campas

Shibasaki Kazuo, Horie Noriko

キーワード：理科教室、親子共同学習、地域貢献

1. はじめに

「たまプラーザ宇宙の学校」も2012年度で3年目を無事終了し、大学内そして地域にも認知された活動になったと考えている。3年目を迎えた今年度の活動で、昨年度までとの大きな違いは、KU-MA（子ども宇宙未来の会）に依頼していた各回の講師を、学生に分担して任せ、名実ともに人間開発学部主体の活動となったことである。「宇宙の学校」を始める契機、目的等は既にこれまでの報告（柴崎・堀江『人間開発学研究第2号』2011、堀江・柴崎『人間開発学研究第3号』2012）で述べているので、今回の報告は、学生スタッフの成長に焦点を置くことにする。なお今回の「たまプラーザ宇宙の学校 2012」の概要については、後に資料としてまとめた。

2. 「宇宙の学校」3年目の開催

前年度までの報告でも述べたことだが、この「宇宙の学校」の狙いの一つに、手助けに入る学生スタッフたちが自然や自然現象を、原理から論理的に理解して児童に的確に伝えることができ、さらに、自ら理科の教材を考え、制作することができるようになることを目指す、ことが含まれている（柴崎、堀江『人間開発学研究第2号』2011）。今年度はこの点についてより踏み込むことにし、各回のスクーリングの内容、そして講師役、をすべて学生にゆだねることにした。

この方針で進めるためには、協力してくれる学生スタッフ（1～3年生）の中に経験者が複数いることが望ましい。幸いなことに、前年ないしは2年連続で協力してくれた3年生が今年度も協力してくれた。一方、前年度協力してくれた2年生のスタッフへの応募が少なく、この点は次年度への継続という観点で問題となる可能性が残った。

また、昨年度から青葉区の後援をいただいたが、昨年は企画立案が遅れ、『宇宙の学校』開催のお知らせを区報に掲載できなかった。これを反省材料に、今年度の日程は昨年度中に決定し、青葉区の区報で広報することができた。その結果と思われるのが、応募者の所属する小学校が昨年度までの2年間とかなり違うことになったことである。一方で、今年度は近隣小学校への特別

のお知らせ、校長会での告知は見送った。

実際の応募状況を見ると、午前の部（1、2年生の児童と保護者）50組募集に対し、67組の応募が、午後の部は40人の募集に対し95人の応募があり、それぞれ抽選を実施して参加者を決定した。午前の部の応募がこれまでの2年間に比べて少なめなのは、前述のように今回は近隣小学校への案内、校長会での案内を行わなかったことが要因と考えている。青葉区の広報にお知らせが載ったことの効果として、抽選の結果今年度の「たまプラーザ宇宙の学校 2012」に参加した小学生の所属が午前の部（50組）で21校、午後の部（40名）は26校と多岐にわたったことである。地域も広がり、また私立小学校からの参加者もいた。

3. 「たまプラーザ宇宙の学校 2012」の企画決定への道筋

前述のように、日程については2011年度中に決定していた。また、第一回目は体育館で開催して、「熱気球」を飛ばす、ことも決定していた。これは、最初に参加者と講師役との共同作業を実施して、共同作業の達成感を通じて仲間意識を持ってもらい、以後のスクーリングでも皆が当事者として参加してもらうことを狙ったものである。なお初回は、開校式をおこない、その後校長である柴崎が、今年度の天文現象を取り上げ、『金環食』、『金星の太陽面通過』、『月食』について簡単に講演も行うことにした。

問題は2回目以降のスクーリングに何を実施するかであった。「たまプラーザ宇宙の学校」のテーマが『飛ぶ、飛ばす』こと、である点は今年度も変更なしであった。さらに、人気の企画である『フィルムケース・ロケット』実施には体育館を使用するのが望ましいということで、第3回目にも体育館の使用を予定していた。体育館で『フィルムケース・ロケット』と同時に実施するのは、『飛ぶ種』がふさわしいと柴崎は考えていたが（教室では実施しにくい企画であり、また人気もあるので）、そうすると、学生に考えてもらうのは、残りの3回の企画と言うことになる。

講師役も学生に任せるということで、3年生に順番にリーダー役を割り振った。リーダーは、各回の企画を考え、当日には参加者へ内容の説明（講師役）を行う。また、班担当者の決定、班リーダーの決定など学生スタッフの役割分担の決定、に責任を持たせることにした。まず、事前（開催の1週間前まで）に打合わせ会を行い、それまでにリーダーは企画を考え、その企画の説明、実施方法を決定して参加スタッフに伝える。実施予定の工作・実験は事前に必ずやってみることにし、子どもたちへの説明手順書もリーダーが用意することにした。昨年度も似た方法をとったが、講師役はK U - M A に依頼していたし、スクーリングの内容は基本的に1年目と同じだった。今年度は、企画決定、講師役、学生スタッフの役割分担、すべてをリーダーに一任したため、リーダーの責任が明確になったと同時に、負担も大きかった。このなかで、『空気砲』、『紙飛行機』という、2つの新しい企画を実施することになった。

3. 1 学生の成長について

リーダー役の学生はかなり重圧を感じていた様である。また、事前準備も大変で、新企画の場合、開催日の2週間以上前から、事前準備・制作に苦勞していた。まず、多くがリーダー役を務めた3年生の学生のアンケートから「振り返り」をみる。

学生のアンケートから一部を抜粋した（ほぼ原文のまま）。

<Aさん（経験者）>

責任に対する意識が変わった。リーダーを務める前までは、誰かに従うことが多く、自分で考えることが少なかったが、リーダーになったことがきっかけとなり、そこから自分で考え、行動しようという意識をもつようになった。また、自分がしっかり物事を考え、人を動かす立場から自分がきちんと物事をこなさなくては多くの人に迷惑をかけてしまうと言う気持ちになり、一生懸命に取り組むことができた。

<Bさん（初参加）>

宇宙の学校は、私が想像していた通りでした。理科の実験を子どもと一緒にいき、新たな発見や、驚きや気付きを子どもにさせること。そのような中で私達が成長できる場でした。想像と異なっていたところは、学生が全てを企画し、運営を行っていくということでした。先生の運営の元、学生が動くと思っていたので、学生主体の活動ということが良いと思いました。私自身、理科は好きだが、教師になったとき、子どもに教えるということを考えると不安が多い教科のうちのひとつです。しかし、避けてきたのも事実です。しかし、宇宙の学校を経験し、理科工作を子どもと共にいっていく中で、こどもたちにとっての「理科」とはなんだろう、と考えるようになりました。もっと「理科」を知りたいと思うようになりました。

共育フェスティバルでリーダーを務めたことです（特に印象に残ったこと）。最後に経験させてもらって、良かったです。

<Cさん（経験者）>

昨年度とはまた違ふこどもたちの様子を見ることができました。今年度は学生が主体となって内容や説明を決めるやり方だったので、思った以上に大変でした。でも、各回のリーダーを中心に、後輩たちや友達がみんな協力して進めていたので、昨年より「協力」する絆が強く感じられました。また、学生主体の運営ということもあり、責任感をかなり感じた学生が多かったように感じます。

こどもたちの反応はほぼ予想どおりですが、保護者が無関心であったり、逆に、子どもと共に考えずに答えを子どもに教えてしまう、といったこともあったようです。（・・・中略・・・）

声かけは本当に大切だとかんじました。昨年までは何と声をかけたらよいか分からなかったのですが、「それは何をかいたの」、「すてきだね」と、たった一声かけてあげるだけで、こどもの表情が笑顔になり、いっそう作業を頑張ります。

<Dさん（初参加）>

参加する前と後では、責任に対する意識が変わった。リーダーを務める前までは、誰かに従

うことが多く、自分で考えることが少なかったが、リーダーになったことがきっかけとなり、そこから自分で考え、行動しようという意識をもつようになった。また、自分がしっかり物事を考え人を動かす立場から、自分がきちんと物事をこなさなくては多くの人に迷惑をかけてしまうと言う気持ちになり、一生懸命にとりくむことができた。

<Eさん（経験者）>

自分たち、つまりはこれから教師になるにあたり、身につけておくべき技能・考え方は何なのでしょう。恐らくその答えは職場に入り「教師」として児童に接したときに初めて分かるものだと思います。では私たちは「教師」でもない立場で何を学ぶべきなのでしょう。多くの授業から理想的な授業形態を頭の中で構築するのも大切かもしれませんが、何よりも子どもを知る、ということが今一番だと私は考えます。直接子どもと接し、何を考え、何を望んでいるのかを目で理解する力を、ある程度この宇宙の学校で身につけることが出来た気がします。

話し方、接し方について、自分は大学に入ったばかりの時、「いい先生」は「同じ立場で一緒に考え行動してくれる人」だと思っていました。しかし去年、この宇宙の学校で「いい先生」とは「自分たちを認めてくれる、理解してくれる人」だと感じました。同じ立場で子どもと遊んだりすることは、正直誰にでも出来ます。ある程度距離をおきながら「児童の気持ちを察しつつ、自分の目指す形へ導くことが教師として重要」ではないかと考えました。話し方、接し方次第では子どもは自分たちに心を開いてはくれますが、注意するとき簡単にナメられます。この宇宙の学校では、話し方、接し方についてのスキルを身につけることが出来ました。

3年生の一部は、今回の『宇宙の学校』開催期間中に教育実習も経験している。教育実習に出かける前と後では、子どもたちに対する態度、話しかけ方等々、格段に差がある。子どもに対する言動に、自信と余裕が認められる。さらに、リーダーとして宇宙の学校の運営にすべて責任を持った体験は、確実に学生を成長させている。リーダーを経験しなくても、実質的最上級生として1、2年生に頼られる経験が、責任感の育成に大いに役立っていることが分かる。

一方で、1年生にとっては大学入学直後の時期に、小学生およびその保護者と接触することは、以後の学修の目標、教員になりたい自分の確認、のために役だっていることが伺える。大学入学後の早い時期に、大学生としての自覚が生まれていることがわかる。また、上級生との違いに気づき、今後の学修について多くの示唆を受けている。

以下に、1年生の「振り返り」をいくつか挙げる。

<Fさん>

宇宙の学校をやっていて自ら学んだことは、「子どもには子どもの言葉がある」ということです。私たちは大学生だからこそ、難しい言葉や微妙なニュアンスを使って話し合っています。しかし、小学生にとっては私たちが普段使っている言葉は難しく、スクーリングの際に「それっ

てどういう意味？」と聞かれたことがありました。私たちの言葉を子ども語に訳すのは意外に大変ですが、子ども語への翻訳は今後の活動でも必要になるし、将来必ず役立つことなので気づけてとてもよかったです。(・・中略・・)

ある先輩は、3・4年生でペアを作って、お互い協力し合って工作をさせていました。私は一斉指導でしか、宇宙の学校の運営を考えていなかったのも、とても驚きました。宇宙の学校をやっていると先輩からの刺激が多く、早く私も先輩のようになりたいと強く思うことがあります。

自分のやり方に自信のなかったときに先輩から「こういうところがすごくよかった」とほめられたときはとてもうれしく、次回以降もがんばろうと思えました。私は4回目のスクーリングのときに、リーダー（*）をやらせてもらいました。最初は私なんかリーダーが務まるのかと不安でしたが、めったにない機会なので成功させたい一心でがんばりました。最終的に、その日のスクーリングを、先輩や先生にほめてもらえたのでとても嬉しく、今では自信につながっています。

*全体のリーダーでなく一つの班のリーダー（柴崎註）

<Gさん>

普段、子どもと接するとき子どもは比較的友達感覚で接してくるが、宇宙の学校では先生という立場で子どもと接する。こういう体験は初めてのことであった。指導者と呼ばれる立場に立つと自分の言葉使い、態度などをとても意識しなければならない。しかし、自分の言葉使いに気をつけながら子どもと話すことは思ったより難しく、なかなか言葉が出てこなかったりした。いつもなら自分から積極的にコミュニケーションを取りに行けるのだが、指導者という立場から初めて対面する保護者という存在もあって自分から話しかけることがまったくできなかった。先輩を見ていると積極的に子どもたちにも保護者にも話しかけ、実験の指導でもわかりやすく簡潔に指導をしていた。また、なかなか指導がいきわたらず、集中を欠いてしまう子どもに対しても効果的に粘り強く指導している姿はさすがだと思った。経験を重ねて少しでも先輩に近付きたいと思った。

終盤の実験では班のリーダーになり、子どもを指導する経験をさせてもらった。サポートにまわるのと大勢の子どもや保護者の前に立って指導するのではまったく責任が違った。とても緊張し、紙飛行機とふわふわ凧の実験だったのだがどんな風に指導を行っていたのかも思い出せないほどだ。思うように指導できず子ども達の集中力が切れかかってしまったりしたが、周りの先輩のフォローなどに支えられてなんとか実験をやり終えることができた。・・・中略・・・もっと経験を積み、少しでも自分の指導力を向上させたいと思う。また実験を通して保護者をみても、それぞれの家庭で指導の仕方が違ったりして興味深かった。一人一人が自分の信じる教育観を持っている。家庭も小さな社会なのだと思う。(・・中略・・)

今年の経験を活かし来年はもう一回り成長した姿で子ども達に向き合いたいと思う。

<Hさん>

今回、一年生として初めて宇宙の学校の手伝いに参加させていただいたことで、実際に子どもたちとふれあったり、教えるという立場になって、実験を行うことができたりと自分の将来の夢に一步近づけたような、そんな貴重な体験をさせていただきました。また、子どもたちに順序よく、細かく区切ったり、大きな声で説明したりと、とにかく分かりやすく伝えること、そして、子どもたちに思いやりをもって接することを学びました。この宇宙の学校の手伝いで最も印象に残ったのは先輩達の姿でした。自分が説明担当するという立場になった時、その難しさをとても実感したのと同時に、先輩達が堂々と子どもたちにとっても分かりやすく、優しく、スラスラと指導していたその姿が、私の中で一番印象に残りました。

このように、一年生は、大学入学直後に参加したこともあって、かなり強い印象をうけている。また、この宇宙の学校での体験が、自分の進路や大学生活を考える大きな契機となっていることもわかる。

これに対し、2年生の印象はもう少し冷静という感じである。昨年手伝った学生も、今年初めてスタッフとして参加した学生も、参加者（子どもたちと保護者）の反応を冷静にみていて、自分の仕事ぶりに対しての思いが比較的強くでている。

それでは、2年生の振り返りから抜粋する。

<Iさん（経験者）>

子ども一人一人はもちろん違っていますが、知っていることから、もっと発展させてあげられるようにならないと、自分の不甲斐なさを改めて感じるばかりでした。わかっていない子ども、できていない子どもへの配慮やめくばり、補助や挽回など、進めていく上で、他のグループと差を感じることが多かったように思います。子どもへの態度も、心なしか焦りや緊張で酷いものになってしまっていたと思います。

わかった事は、しっかりと目を見て話してくれる子、恥ずかしがっても合わせようとしてくれる子、合わせてくれない子、様々でしたが自分からいく姿勢が大切で、話しをするのにも（大人数）間が必要で・・・など、その場にいないければ、接さなければわからないことがたくさんあるということがわかりました。

<Jさん（初参加）>

子どもはわからないことがあるとそれをどんどん知りたくなる。また知ってることがあるとどんどん言いたくなるということがこの宇宙の学校で見受けられました。ですから子どもたちに答えさせて進行していくという手もあるし、子どもたちにわからないことを刺激して進行していくなどいろいろな進行方（ママ）があると思いました。また、子どもたちに話しを聞いてもらうときには、上から話しかけるのではなく、同じ目線にして目を見て話すとよく話しを聞

いてもらえるということを改めて実感しました。(・・中略・・)

私は宇宙の学校のように「教える」「手伝う」といった形で子どもたちと関わったことがほとんどありませんでした。なので子どもたちの反応にとっても新鮮なものを感じました。今までは、遊ぶや見せるなどの機会は何度かありましたが、そこでは見られないような行動力や課題に真剣に取り組む姿勢などの姿を見ることができたことがこの宇宙の学校に参加してとても印象に残っていて、またそのような姿が見れてとても学びになりました。

<Kさん（経験者）>

声のトーン、話すスピード、目線、説明の内容、全てにおいて変えるべきだと感じさせられた。特に説明の仕方は、マニュアル通りにすると絶対に通じないため、子どもの必ず知っている物におきかえたり、実際に作った物を見せる、一緒に作るなど、アプローチはさまざまだから、毎回試してみようと思った。

<Lさん（経験者）>

昨年は参加した中でも、本当に手伝いという日が多くあった。しかし、今年は班の中で説明したり、作業を進めていく立場になった。見ているだけでは分からない、伝えることの難しさを知った。(・・中略・・) 自分たちで事前に準備する際に、どんな形が作られるか、それだとどんな風に回るか、どう回るかが元の見本の種に近いかということを考えておけば、もっと対応できたと思うので、来年もやるとしたらスタッフの中でも工作について更に研究する必要があると感じた。(・・中略・・)

私自身は「先生」としての立場を体験して、その立場から見た子どもたちと接すると、工作が完成したり、実験が上手くいったときの嬉しそうな顔を見ることで、私も嬉しいと感じるようになった。知らなかった、分からなかったことを教え、子どもに変化があることの喜びが先生の喜びなんだと思った。ただ子どもと楽しいことをして楽しむだけでなく、そういった喜びを感じたいと思うようになった。

昨年度までも、宇宙の学校を手伝ったことにより学生が成長したことは伺える。だが、今年度は学生に運営のほとんどを任せただけで、一層の成長を実感したことがあきらかである。やはり、学生の成長を促すには、責任を持たせ、信用して預ける、ということが何よりのことであるとの思いを強くしている。『宇宙の学校』をたまプラーザキャンパスで実施する目的のひとつが、見事に実を結んでいることを確認する今年度の開催であった。

3.2 プログラムについて

「たまプラーザ宇宙の学校 2012」の概要

- 1) 広報：青葉区広報4月号、大学HP（ホームページ）、KU-MAの会HP、CATV（4月16日テロップ放送）

2) 応募状況：午前の部（小学校1、2年生＋保護者）67組（抽選で50組に）

午後の部（小学校3、4年生）95人（抽選で40人に）

学年の内訳：午前の部 1年生24組、2年生26組

午後の部 3年生28名、4年生12名

3) 企画実施状況（会場は410教室、ないしは体育館アリーナ）

5月20日（日）： 開校式と「熱気球」制作（体育館で実施）

※家庭学習用テキスト配布

6月17日（日）： 空気砲（新企画）、かさ袋ロケット

7月22日（日）： 種の模型制作、フィルムケース・ロケット（体育館で実施）

9月30日（日）： ふわふわ凧とふわふわ飛行機（新企画）、紙飛行機（新企画）

10月14日（日）： ミニ講演「『はやぶさ』について」的川 泰宣（KU-MA会長）

葉脈標本のしおり、レポート発表会

以下の表に各回の参加者状況等をまとめた。

表1

	第1回 5/20 開校式	第2回 6/17	第3回 7/22	第4回 9/30	第5回 10/14 閉校式
ミニ講演	地球と宇宙、 金環日食、気球				「はやぶさ」
制作1	熱気球	空気砲をつくろう	種の模型を作ろう	ふわふわ凧、ふわ ふわ飛行機	葉脈標本のしおり
制作2		かさ袋ロケット	フィルムケース・ ロケット	紙飛行機	レポート発表

午前	参加組数	49	46	42	44	39
	学生	17	15	13	10	10
午後	参加人数	37	38	33	37	28
	学生	16	15	13	8	10

学生スタッフ：1年生6名、2年生10名、3年生6名（すべて初等教育学科所属）
以上の他に、今年度もオープンキャンパス（7月15日）と共育フェスティバル（10月28日）において「たまプラーザ宇宙の学校」として企画を実施した

7月15日（日） 企画内容：空気砲の実演、ペットボトル空気砲の制作、かさ袋ロケット制作

参加者：子ども98人、保護者60人

スタッフ：教員2名、学生9名

10月28日（日） 企画内容：空気砲の実演、ペットボトル空気砲の制作

参加者：子ども36人（午前）＋29人（午後）、保護者30人（午前）＋28人（午後）

スタッフ：教員2名、学生6名

※ここで今年度初めて実施した工作・実験の内容について簡単に記しておく。

空気砲：学生のオリジナルではないが、段ボール箱に丸い穴をあけ、衝撃を与えると穴から空気が、かなりの勢いで飛び出す。今回は「煙発生器」を購入して、空気を可視化した。巨大段ボール箱も制作して、デモンストレーションした。参加者に好評であった。小学生には、ペットボトルの下部を切り取って、そこにゴム風船の半分をつけ、ゴムを引っ張って、離す動作で、ペットボトルの口から空気を吹き出させた。

紙飛行機+ふわふわ飛行機：紙飛行機は普通の工作。ふわふわ飛行機は、薄い発泡スチロールの板をわずかの加工、で飛ばす。ちょっとした工夫で、見事に滑空する。

昨年同様「たまプラーザ宇宙の学校 2012」開催の様子は、人間開発学部のホームページ²⁾とKU-MAのホームページ¹⁾で確認できる。最終回に参加児童が発表した、家庭で実施した実験・工作のレポートも、KU-MAのホームページに、これまでの分も含めすべてが掲載されている。

4. 「たまプラーザ宇宙の学校 2012」開催結果の評価について

今年度も参加者に、アンケートをお願いした。その結果は、昨年度までの結果と大きな変化は見られなかったので、簡単に概要だけ述べる。

4.1 参加者対象アンケート

各回のプログラムと参加者数は表1の通りである。プログラムの内容については、事前に知らせていない。おおむね出席率はかなり良いが、最終回は、各回とも約2割以上の欠席者がでてしまった。しかし、今年度は無断欠席した人はほとんどいなかった。

午前の部 保護者対象アンケート：回答数39

午後の部 児童対象アンケート：回答数：28

問1) お子さんは何年生ですか？

1年生	21
2年生	18

問1) あなたは何年生ですか？

3年生	19
4年生	9

問2) 開催情報の入手

青葉区広報によるものがほとんどであった。

問3) 応募の動機

記述式の複数回答で答えてもらった。昨年度までと基本的には変わらない。

① 子どもへの期待

(主な回答)	科学・宇宙への興味・好奇心を持ってもらいたい
	子どもの興味を広げるため
	子どもにとって有益な体験になるから

② 保護者自身の希望・判断

(主な回答)	楽しそう、面白そう、近い
	家・学校でできないことが出来る
	手軽に科学を楽しめ親しむ良い機会

といったところである。

問4) 参加回数 (午前)

4 回	8
5 回	30

問4) 参加回数 (午後)

4 回	7
5 回	19

午前、午後の部ともに、今年もスクーリング全5回にすべて参加したのは7割ほどであった。午前の部、午後の部とも、最終回に参加した全員が4回以上で参加者の意識の高さが伺える。

問5・6) 最も気に入ったプログラム (複数回答)

これも例年通りで、午前の部の保護者には「熱気球」、子どもたちには「フィルムケース・ロケット」がもっとも人気があった。午前、午後とも「葉脈標本のしおり作り」が人気が高く、午後の部では人気1位であった。

問7) 自宅で工作・実験をいくつしましたか？

家庭での工作・実験は「宇宙の学校」の意図するところでもあるが、1つまたは2つ実施したという回答が全体の約7割を占めた。5つ以上という答えも、午前で4人、午後で3人あった。

問8) 「宇宙の学校」に参加して良かったですか？

これも、保護者、子どもたちも9割以上が「とても良かった」「まあまあ良かった」と答えてくれた。ただ、子どもたちの方が評価は厳しい。また、「まったく期待はずれだった」と答えた子どもが午前中に1名いたことは、明記する必要がある。

問9) 来年も参加したいと思いますか？

これも昨年度までと同様、来年も参加したいと回答してくれた方が9割以上いる。

問10) 参加した感想

記述式の複数回答であり、個々の解答は今回は省略する。全体的には好意的な答えが多いことは、昨年度までと同様であった。

4. まとめ ― 次年度に向けての反省と課題 ―

宇宙の学校も3年目を終了し、運営については、ほぼ軌道にのったと考えている。次年度以降も引き続き開催する予定である。

まず、日程については、昨年度の反省を経て、今年度はほぼ一ヶ月ごとの開催とした。実は、学生に運営を任せたことで、これでもかなりきつい日程であった。ただ、大学として行事を考えると、11月以降の開催は難しいので、次年度5月～10月で、夏休みは除いての開催とならざるを得ない。なにか、手立てを考える必要は感じている。

学生スタッフの参加数が、今年度当初は予想より少なく、急遽一本釣りをすることになった。特にこれといった解決策もなく、次年度も早い段階から多くの学生にアピールし、経験者には口コミで学生参加を促してもらうしかないであろう。

運営については、次年度も学生に任せることにしたい。ただ、最終回の参加者が若干減る傾向にあるのは、家庭での実験・工作を発表させるといったことに、プレッシャーを感じている保護者がいる可能性が出てきた。この点は、次年度以降の大きな課題となる。

参加者募集についても、青葉区の広報中心で問題ないと判断している。ただ、3、4年生対象の午後の部は中止することにした。宇宙の学校開催の目的の一つは、『家庭を巻き込んでの学習』意欲を高めることにあり、保護者と小学生の連携、協力を大切にしている。その観点から、児童だけの参加となる午後の部は、実施しないことにした。午前、午後の違いは、学生スタッフにとっては、大変良い体験となっていることは確かだが、次年度は、保護者を巻き込む運営という観点で工夫してもらうことにしたい。

今年度は2つ、新しい企画が生まれたが、次年度も学生の努力に期待したい。

5. おわりに

第3回「たまプラーザ宇宙の学校」の開催までの経緯、実施状況、成果、反省点と課題を報告した。1年目、2年目ときて3年目の今年は、このプログラムが大きな果実を実らせつつあることを感じさせてくれた。さらなる発展を期して、緊張感を失わずに、新しいことに挑戦することを忘れずに次年度も実施していきたい。

最後に、今回のプログラムを成功裏に実施出来たのは、KU-MAの的川会長、事務局の田口氏、本学人見職員および学生スタッフの献身的な努力の賜であった。皆様に心から感謝する次第である。

平成24年度学生スタッフ（下線は前年度経験者）

1年 宇津川晶子、佐藤真衣、日比野良子、丸山雄志、齊藤恵美、山口彩

2年 加茂真裕子、黒田真以、佐藤亜紀、鈴木美祐、小林詩織、坂田望美、増田紘也、村川実咲
福寫彩子、山崎早弥香

3年 遠藤寛佳、佐直由佳、宮下弘大、黒川由衣、横島友理絵、米谷元

参考

1) KU-MA ホームページ ; URL <http://www.ku-ma.or.jp/>

2) 國學院大學人間開発学部 ホームページ ; URL <http://www.kokugakuin.ac.jp/human/>

(しばさき かずお・國學院大學人間開発学部教授、ほりえ のりこ・同学部助手)